＜小学校外国語活動・中学校英語＞

主体的にコミュニケーションを図る資質・能力の育成
～結の橋 E プランの作成を通して～

宮古島市立佐良浜小学校　教諭　新　城　直　人
宮古島市立佐良浜中学校　教諭　友　利　芳　江

Ⅰ　テーマ設定の理由

グローバル化が急速に進展する中で，外国語によるコミュニケーション能力は，これまでのように一部の業種や職種だけでなく，生涯にわたる様々な場面で必要とされることが想定され，その能力の向上が課題となっている。

平成２９年３月に告示された小学校学習指導要領では，これまでの外国語活動の成果と課題を踏まえ，中学年に外国語活動，高学年に教科外国語が導入された。小学校における外国語教育の新しい段階では，中学年から「聞くこと」「話すこと」の音声面を中心とした外国語活動を通じて外国語に慣れ親しみ，外国語学習への動機付けを高めた上で，高学年から段階的に文字を「読むこと」及び「書くこと」を加え，総合的・系統的に扱う教科学習を行うとともに，中学校への接続を図ることが求められている。そして中学校では、小学校における学習との接続に一層留意するとともに，学びの連続性を意識した指導をするため，小学校３学年から６学年までに扱った簡単な語句や基本的な表現などの学習内容を繰り返し指導し定着を図るなど，育成を目指す資質・能力を生徒が確実に身につけることができるよう工夫する必要がある。

また，文部科学省の「グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言」では，小・中・高等学校が連携し，一貫した英語教育の充実・強化のための改善が求められている。その際，4 技能を活用して実際のコミュニケーションを行う言語活動を一層重視し，間違いを恐れず，積極的に英語を使おうとする態度を育成することと，英語を用いてコミュニケーションを図る体験を積むことが必要であるとしている。

平成３１年度に，伊良部島小中一貫教育校『結の橋学園』が開校を迎える。その柱の一つとなっているのが，小学校１年生からの英語教育である。各学年の特性，実態に合った指導内容を作成し，前期（小１～小４），中期（小５～中１），後期（中２～中３）と効果的な繋ぎが出来るよう，９年間を見通した英語教育のカリキュラムを作成する。

校区内児童生徒の実態として，学年が上がるにつれ英語が好きと答える割合が少なくなっていることから，効果的なつなぎができていないことが要因であると考えられる。中学校で，話すこと以上に書くことを苦手とする生徒が多いことも，音声から文字へのつなぎが上手くできていないことが要因であると考えられる。また，小学校では，英語を話すことを苦手に感じる児童が約半数を占めており，さらに高学年では，約７割が英語を話すときに不安であると感じている。このことから，英語を用いてコミュニケーションを図る体験を積み重ねることで，間違いを恐れず，積極的に英語を使おうとする態度を育成する必要があると考えられる。幸い，小学校・中学校共に，話すことは苦手ではあるが１番伸ばしたい活動となっていることと，約８割の児童生徒が，ペア・グループ活動が好きで授業の理解に役に立つと感じていることから，ペア・グループでの効果的なコミュニケーション活動を多く取り入れ，不安なく英語で表現することができる児童生徒の育成を目指す。

結の橋学園卒業時には，主体的に英語を用いてコミュニケーションを図る資質・能力を身につけさせたいとの理由から，本テーマを設定した。

Ⅱ　研究目標

主体的にコミュニケーションを図る資質・能力を育成するために，９年間を見通した英語教育のカリキュラムを作成し，小学１年生から段階的・横断的な指導，ペアワークやグループワークなどの学習形態の工夫を実践的に研究する。

Ⅲ　研究仮説

結の橋学園における小中一貫した英語教育において，段階的・横断的な指導や学習形態を工夫すれば，主体的にコミュニケーションを図る資質・能力が身につくであろう。

Ⅳ　研究の全体構想図

・結の橋学園教育課程研究推進協議会（提言）
・四校統合協議会

〈結の橋学園教育目標〉
ふるさとに誇りを持ち　世界へはばたく
－賢い子(知) 優しい子(徳) 逞しい子(体)－

・児童生徒の実態
・保護者，地域の願い
・教師の願い

〈研究テーマ〉
主体的にコミュニケーションを図る資質・能力の育成
～結の橋Ｅプランの作成を通して～

〈研究目標〉
主体的にコミュニケーションを図る資質・能力を育成するために，９年間を見通した英語教育のカリキュラムを作成し，小学１年生から段階的・横断的な指導，ペアワークやグループワークなどの学習形態の工夫を実践的に研究する。

〈研究仮説〉
結の橋学園における小中一貫した英語教育において，段階的・横断的な指導や学習形態を工夫すれば，主体的にコミュニケーションを図る資質・能力が身につくであろう。

〈研究内容〉
１．学習指導要領，参考文献，各種資料などによる理論研究
　（１）小学校英語教育
　（２）中学校英語教育
　（３）伊良部島小中一貫教育校の英語教育について
２．結の橋Ｅプランの作成
　（１）英語全体計画の作成
　（２）英語単元系統配列一覧表（１学年～９学年）
　（３）小中学校年間指導計画
　（４）評価規準（Can-do リスト）
　（５）小学校低学年の指導内容及び指導計画
　（６）小学校教材の活用プラン

Ⅴ　研究内容

１　コミュニケーション能力について

新学習指導要領では，小学校の外国語活動の目標は「コミュニケーションを図る素地となる資質・能力の育成」であり，外国語科の目標は「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力の育成」である。また，中学校外国語科の目標は「コミュニケーションを図る資質・能力の育成」であり，「コミュニケーション能力の育成」が大きな柱になっており，結の橋学園においても９年間を通して，「主体的にコミュニケーションを図る資質・能力の育成」を図っていきたい。

（1）英語科におけるコミュニケーション能力

Canale(1983)によると，コミュニケーション能力は以下の４つの要素から構成されている能力であるという考え方が広く受け入れている。

①文法能力（文や文章を作り出す能力）
②社会言語学的能力（発話の適切さを判断できる能力）
③談話能力（文レベルではなく文章の構成に関わる能力）
④方略的能力（語彙力などの不足等を補ってコミュニケーションを続けていく能力）

（2）方略的能力の観点

Savignon(1983)は，上記の４つの構成要素は，学習の段階が進むにつれて，その割合が変化するものであると「動的」にとらえている。コミュニケーション能力のモデルを図１のような「逆ピラミッド」型で表すと，学習者ははじめピラミッドの先端（図では下の方）の位置にいる。文法的能力，社会的言語学的能力，談話能力は皆無に近い状況で，方略的能力のしめる割合は大きいと言うことが分かる。新学習指導要領においても，「コミュニケーション」を重視するというのは，Savignon のコミュニケーションモデルの考えからすると，きわめて自然な学習のプロセスである。図２は，大城(2008)が Savignon の逆ピラミッド型コミュニケーション能力の発達を，日本の外国語教育に当てはめて図式化している表である。

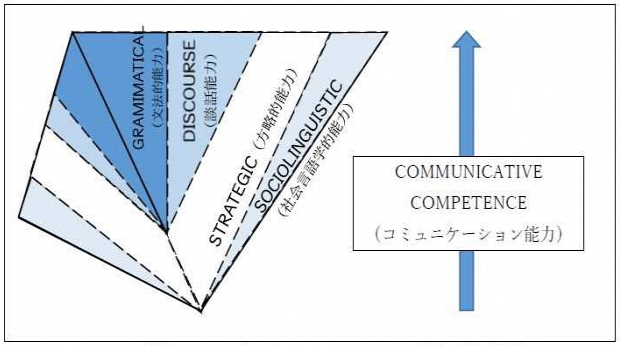

図１　Savignon の「逆ピラミッド」（コミュニケーション能力の構成要素
The components of communicative competence）

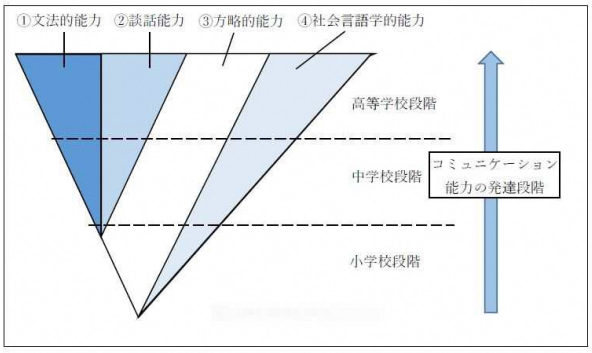

図２　日本の英語教育のモデル（大城 2008）

（3）「主体的」の捉え方

「主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度」とは，単に授業等において積極的に外国語を使ってコミュニケーションを図ろうとする態度のみならず，学校教育外においても，生涯にわたって継続して外国語習得に取り組もうとするといった態度と捉えている。例えば，道で困っていそうな外国人を見かけると「Can I help you?」や「Do you need any help?」

など，自ら外国語を用いて主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てていきたいと考える。

(4)大まかな指導の流れ

1学年からの9年間の英語学習では，ペアやグループで英語を用いたやりとりをする場面を設定する。また，単元構成を各学年同じようにし，前学年の内容を繰り返し学習することで定着を図る。

【身に付けさせたい英語の力】

中学校卒業時の目指す生徒像として

「目的や場面、状況などに応じて、日常的な話題や社会的な話題について、英語で簡単な情報や考えなどを理解したり、これらを活用して表現したり伝え合ったりし、主体的にコミュニケーションを図ることができる生徒。」

前期 （1～4年）	伝え合う力の素地を，外国語を「聞くこと」,「話すこと［やり取り］」,「話すこと［発表］」を中心とした言語活動を通して養う。
中期 （5～7年）	伝え合う力の基礎を，外国語を「聞くこと」,「読むこと」,「話すこと［やり取り］」,「話すこと［発表］」,「書くこと」の五つの領域を統合した言語活動を通して養う。
後期 （8～9年）	外国語で簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするなど，複数の領域を統合した言語活動を通して養う。

2 小学校英語教育について

(1) 英語教育のこれまでの流れ

4つのステージ	期間	審議会の答申等
1 研究開発学校での英語教育 ＜英語活動＞	平成4(1992) ～13(2001)年	・外国語教育の改善に関する調査研究協力者会議（平成5年） ・『英語が使える日本人』育成のための戦略構想（平成14年） ・教育再生実行会議（第3次提言）（平成25年） ・グローバル化に対応した英語教育改革実施計画（平成25年） ・英語教育の在り方に関する有識者会議提言（平成26年） ・中教審時期学習指導要領答申（平成28年） ・次期学習指導要領告示（平成29年）
2 「総合的な学習の時間」の中での英語教育＜英語活動＞	平成14(2002) ～22(2010)年	
3 英語教育必修化 ＜外国語活動＞	平成23(2011) ～31(2019)年	
4 英語教育教科化 ＜外国語活動・外国語＞	平成32 （2020）年～	

(2)小学校外国語活動の「成果と課題」

成果	【児童】 ○小学校の５，６年生の７０．９％が「英語が好き」と回答。 ○小学校の５，６年生の７２．３％が「英語の授業が好き」と回答。 ○小学校の５，６年生の９１．５％が「英語が使えるようになりたい」と回答。 【指導者】 〇外国語活動導入前と比べ，小学校の教員の７６．６％が小学校５，６年生の児童に「成果や変容がとてもみられた」と回答。そのうち， ・７８．５％が「音声に慣れ親しんだ」 ・６４．２％が「基本的な表現に慣れ親しんだ」と回答。 〇外国語活動導入前と比べ，中学校教員の６５．３％が中学校１年生の生徒に「成果や変容がとてもみられた」と回答。その変容の具体として， ・９２．６％が「英語を使って積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成されている」 ・９３．５％が「英語の音声に慣れ親しんでいる」と回答。 （文部科学省：平成２６年度　小学校外国語活動実施状況調査の結果）
課題	●音声中心で学んだことが，中学校の段階で音声から文字への学習に円滑に接続されていない。 ●日本語と英語の音声の違いや英語の発音と綴りの関係，文構造の学習。 ●高学年は，児童の抽象的な思考力が高まる段階であり，より体系的な学習が求められる。 （文部科学省：小学校学習指導要領〔平成２９年告示〕解説　外国語活動・外国語編） ●小学校の外国語活動でもっと学習しておきたかったこと（中１） ・８０．１％が「英単語を読むこと」 ・８３．７％が「英単語を書くこと」 ・７９．８％が「英語の文を読むこと」 ・８０．９％が「英語の文を書くこと」をもっと学習しておきたかったと回答。 （文部科学省：平成２６年度　小学校外国語活動実施状況調査の結果）

(3)中学年の外国語活動及び外国語科導入の趣旨(要約)

小学校外国語活動の成果と課題を踏まえ，今回の改訂では，中学年から外国語活動を導入し，「聞くこと」,「話すこと」，を中心とした活動を通じて外国語に慣れ親しみ外国語学習への動機付けを高めた上で，高学年から発達の段階に応じて段階的に文字を「読むこと」,「書くこと」を加えて総合的・系統的に扱う教科学習を行うとともに，中学校への接続を図ることを重視することとしている。

(4)中学校への接続と教科化へ向けて(新教材”We can!”のポイントからみて)

①各ユニットでは「聞くこと」「話すこと」からスタートし，音声に慣れ親しんだ後に，「読むこと」「書くこと」の言語活動に取り組む

②「聞くこと」「話すこと」を中心とした中学年における外国語活動の学習内容を繰り返し活用しつつ広がりのある話題を設定（例）行ってみたい国や地域（”We Can! 1”Unit6)，オリンピック・パラリンピック（”We can! 2”Unit6)

③「読むこと」「書くこと」に対応したコーナー（'Let's Read and Write' 'Story Time'）を設置
④中学校への接続を重視し，より豊かなコミュニケーションとなるよう，代名詞（三人称），動名詞，過去形などを含む基本的な表現に繰り返し触れるよう工夫されている。

（5）評価について

外国語教育における学習評価については，中教審答申において次のように指摘されている。

○外国語活動

・「知識・技能」，「思考・判断・表現」，「主体的に学習に取り組む態度」の３観点
・数値による評価にはなじまなく，文章の記述による評価を行うことが適当
・活動の観察やワークシートや作品等による評価が適切

○外国語科

・「知識・技能」，「思考・判断・表現」，「主体的に学習に取り組む態度」の３観点
・数値による評価を適切に行うことが求められる。
・「聞くこと」及び「書くこと」と「読むこと」の文字に関する評価については，活動の観察，ワークシートや作品（ポスターやパンフレット）の分析，ペーパーテスト等の方法が考えられる。「話すこと」の評価については，活動の観察，パフォーマンス評価，授業内の発表等の方法が考えられる。

※評価については，国立教育政策研究所教育課程研究センターからの資料が出てからの検討

３　中学校英語教育について

（1）中学校外国語科改訂の趣旨

①急速なグローバル化の中で，コミュニケーション能力の向上は急務である。
②小・中・高等学校の一貫した外国語教育と，４技能を総合的に育成することをねらいとした現行学習指導要領の下，指導の充実が図られてきたが，学年が上がるとともに学習意欲が減少し，学校間の接続が十分とは言えない。
③小学校外国語活動の成果もあり，中学校では積極的に英語でコミュニケーションを図ろうとする態度が育成され，「聞くこと」「話すこと」に慣れ，教師の英語使用や生徒の英語での言語活動は増えた。一方で，文法・語彙等の知識獲得に偏重が見られる。「やり取り」や「即興性」を意識した活動や統合的な言語活動等で，コミュニケーションの目的・場面・状況等に応じて自分の考えや気持ちなどを適切に表現する力が十分とは言えない。

（2）新学習指導要領の主なポイント

○改訂の要点

・目標の改善：４技能５領域：「聞くこと」「読むこと」「話すこと[やり取り]」「話すこと[発表]」「書くこと」（CEFR を参照）
・内容構成の改善：小学校や高等学校における指導との接続に留意する
・内容の改善・充実：取り扱う語数：「1200 語程度」➡「1600～1800 程度」
・学習指導の改善・充実：小・中学校の接続を重視する，授業は英語で行うことを基本とする等

○中学校１年生（７年生）への指導について

小学校における外国語活動や外国語科の内容，指導等の実態や生徒の興味・関心等を十分に踏

まえるとともに，生徒が在籍していた小学校において，どのような時間割編成，指導体制によって授業が行われているかを把握することにより，中学校への円滑な接続を図ることが必要である。

〇言語活動の定義

言語活動は実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの活動であると説明されている。そして，言語材料について理解したり練習したりするための指導と区別している。例えば，ある文法事項を練習するための文型練習などは，改訂前は言語活動の一つであったが，改訂後は言語材料を練習するための指導とみなされ，言語活動ではなくなった。

４ 結の橋学園Ｅプランについて

（1）英語活動単元指導計画

ア 低学年からの英語活動

学年	年間配当時数	充当教科・時数
第１学年	１２時間	生活科８時間　音楽２時間　図画工作２時間
第２学年	１５時間	生活科８時間　音楽２時間　図画工作２時間　体育３時間

※小中一貫教育を行う併設型小学校・中学校の教育課程の特例を適用

イ 絵本を取り入れた授業

①「小学校学習指導要領 外国語活動編:(1) 聞くこと イ」より

英語に初めて触れる段階であることを踏まえ，話し手の表情や身振り，イラストや写真などを手掛かりとして，基本的な表現を聞いて理解することから徐々に手掛かりがなくても意味がわかるようになることを目指している。

「小学校学習指導要領 外国語編:イ 読むこと（エ）」より

絵本には，内容理解を促すための絵や写真がふんだんに使用されているということのほか，主題やストーリーがはっきりしているという特徴がある。したがって，「絵本」という例示により，児童に複数の文を読ませる際は，何らかのテーマについて話の展開が分かりやすく書かれているものを読ませることの必要性を示している。加えて，絵本には，同じ表現が意図的に繰り返し示されているという特徴もある。

② 絵本の読み聞かせ

中学年の児童の多くは，外国語活動で初めて英語に触れることも多く，この段階では，理解可能な大量のインプットを与えることが重要である。同時にこの時期の児童にとって，絵本は身近な教材であり「英語を聞いて分かった」という体験ができる良質な教材であるといえる。

〇絵本を活用することの効果

・読み聞かせ活動では，児童が指導者の英語を聞き，絵の助けを借りて「英語を聞いて意味が分かる」体験をすることができる。この体験は、小学校低学年でも可能であると考える。

・良質なまとまりのある英語をインプットできる。

・絵本には同じ表現が繰り返し出てくるため，自然に語彙や表現を身に付けやすい。

〇読み聞かせの留意点

・ジェスチャーを多用したり，絵本に載っている文言をそのまま読むのではなく，絵本の英語を児童に理解しやすく別の言葉で言い換えたりして，児童の理解を助ける。

・一方的に聞かせるのではなく，児童に絵本の絵やあらすじについて時折質問したり，「児童とやり取り（インタラクション)」「間を取る」などしながら，児童のつぶやきを拾い上げたりや繰り返しを引き出したり，児童を絵本の世界に引き込むようにする。

・ひと通り読み聞かせ後，注目させたい点を示し，もう一度読み聞かせをする。

〇絵本を選ぶ際の留意点

・指導する単元のねらいや題材，言語材料にふさわしいものを選ぶこと

・児童の発達の段階に応じた多様な使い方のできるものが望ましい。

（例）ストーリーが完結で分かり易く，同じ表現が繰り返し使われているもの
児童が日本語で読んだことのあるもの　など

・英語の絵本の中には，英語圏の児童に向けてかかれたもの，日本の児童に向けてかかれたものなどがあり，それぞれに特徴があることを理解すること。

・学級全体に見えるように，大型絵本を使うなど，教室の大きさ，児童の人数等に合わせて，絵本の提示の仕方を考えること

（参考文献：小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック）

ウ 単元構成

単元を中学年以上と同じような構成にすることで，前学年で学習したことを思い出せるようなスパイラル型の授業の展開ができる。

エ 検証授業

1　テーマ　色

2　指導観

〇児童観

本学級の児童は，外国語活動の授業を初めて行う。英語学習塾に通っている児童が４名程いたり，父親が外国人（英語圏）の児童がいたりして，英語にふれる機会はある。また，他の児童も普段の生活を通して，簡単な色や身近な動物などを英語で聞いている経験はあるであろう。初めての外国語活動の授業なので英語って楽しいと感じることのできる授業を展開したい。

〇教材観

「色」は，児童が幼児期からテレビ番組（ヒーロー戦隊など）や大人との会話などを通して，英語で聞いたり言ったりすることを多少経験してきているであろう。また，色を英語で表すとカタカナでも表しやすく，絵本などでアルファベットとカタカナが同表記されているのもめずらしくない。児童にとっても色は身近な英語であるといえる。

○指導観

指導に当たっては，導入でモノクロの写真や絵を何枚か見せる。留意点は，児童が「言いたい」と思うような教材を選ぶことである。また，日本語で「青」と言う児童に対しては”Oh, nice! Blue”と日本語を英語で言い換えをしていきたい。活動する際には，チャンツや歌を使用し児童の興味関心を持続させたり，絵本を用いて，慣れ親しんだ語彙が聞き取れたという達成感を持たせたりしたい。

3　本時の指導目標

①色の言い方に慣れ親しむ。（外国語への慣れ親しみ）

②積極的に自分の欲しい色を伝え合おうとする。

（積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度）

4　言語材料

○表現（児童の発話）

(Red), please.

○語彙（児童が使う語彙）

色(yellow, brown, purple, green, red, gold, blue, black, white)

5　該当する学習指導要領における領域別目標（外国語活動参照）

聞くこと	ア　ゆっくりはっきりと話された際に，自分のことや身の回りの物を表す簡単な語句を聞き取るようにする。
話すこと［やり取り］	ア　基本的な表現を用いて挨拶，感謝，簡単な指示をしたり，それらに応じたりするようにする。

6　本時の指導案

時間	展　　開	留意点
導入(13)	○あいさつ ○Let's Try 1 p.3 [Let's Chant] 前後左右の友だちとあいさつをして名前を言って，ハイタッチ ○Let's Read [Brown bear] ○白黒の絵を見せて何色か聞く（パワポ） 児童が日本語で答えたら教師は英語で	●元気よく ●前回読んだ絵本をやり取りしながら読む ●アニメキャラやくだもの、信号機など，児童がよく知っているものが良い

展 開 (27)	○めあての確認 「色を英語で言ってみよう！」 ○色カードを見ながら練習 ○替え歌「ぐーちょきぱーで何作ろ」の曲に合わせて yellow, brown　yellow, brown purple, green　purple, green red, blue, gold　red, blue, gold black and white　black and white ○Activity 教室内を自由に歩き，あいさつをしたらじゃんけん勝った人は，Red, please. と言ってカードをもらう ○替え歌［Let's Sing］ ○今日習った好きな色を塗る。 ○塗った色を紹介する。 T: What do you see?” S: Blue.	●全員で声を出して読み，確認させる ●替え歌に出てくる色のカードを用意 ●教師が歌って聞かせる 最初はゆっくり（２～３回歌う） ●色カードを１人５枚ずつ持たせる。カードがなくなったら教師にもらいにいく
まとめ (5)	○めあてが達成できたかどうか感想を発表させる ○Let's Try 1 p.8［Let's Sing 2］　Goodbye Song ○あいさつ	

〔授業の様子〕

【授業後の考察】

○低学年の児童が英語に興味をもっていることが分かった。

○絵本の読み聞かせに対する反応が良かった。

○間違いを恐れず、英語を使っていた。

❶色を塗る作業に時間がかかってしまい、授業時間がオーバーしてしまった。

❷低学年への指示の仕方に慣れていない。

❸次の活動へのつなぎがスムーズではなかった。

＜改善策＞

❶色を塗る用紙Ａ５サイズをＡ６サイズに活動時間を短くした。

❷担任の先生に細かい指示をしてもらった。

❸色を紹介するフラッシュカードに絵本のキャラクターを使用し，授業の流れを意識した。

※後日，改善した指導計画で伊良部小学校１年１組にて授業を行った

（2）英語教育における小中連携

ア 英語教育の5つのギャップ（小学校英語早分かり実践ガイドブック高学年用参照）

① カリキュラム編成の違い

中学校の教育課程の編成原理は文法項目による配列であり，それらの習得と運用が中心だが, 小学校は基本的にトピックや場面, 機能が中心である。しかし, 新学習指導要領では, 新たに「話すこと[やり取り]」が設定され，即興で伝え合うことが目標として掲げられている。そのため，授業でもコミュニケーション活動を多く取り入れることとなるであろう。

② 指導方法

小学校ではゲームや遊び的な活動も多く，動機付けを高める配慮がなされていたり，目的感を持った伝え合いも重視されたりしている。一方，中学校英語は，言語材料や技能を習熟することが優先され，文法や表現の正確さを高めるための練習が基本である。

③ 読み書きの増加

これまでの小学校外国語活動が音声中心であるため，中学校に入ってから生徒たちが学ぶ読み書きの増加はかなり急激なものになっていた。今後は、小学校で文字に慣れさせる指導が段階を踏んで導入される。

④ 練習・家庭学習の増加

中学校では、小学校では求められなかった「努力して学ぶ」という学習モードが増え、一般にコツコツと基礎的な練習を積んでいく堅実さが必要な学習にシフトしていく。

⑤ 評価

外国語活動の評価は定着を求めない慣れ親しみの評価で記述によるものである。中学校では，定期的にテストが行われ点数化され，その中では読み書きや文法の正確さなどが重視されるようになり，子どもたちは小学校の英語とはかなり違った学習習慣と真剣さが求められる。

注：必ずしも全部の学校がそうではない。宮古地区ではコミュニケーション能力を重視し，パフォーマンステストなども実施している学校も多い。

イ 小中連携

① 連携に向けての共通認識

・小学校学習指導要領外国語活動・外国語編，中学校学習指導要領外国語編の指導目標，内容等の確認

・生徒の興味・関心や小学校での指導体制の把握

・結の橋学園卒業時の生徒像の共有

② 教材の連携

・小学校の教材を中学校でも使用，小学校でやったことが中学校英語につながっている。

小中教材連携　　中学校の単元に関連する小学校教材

学年	単元	内容	テキスト	P.	活動	歌詞
1年	Hi, English 1	あいさつ	Let's Try 1	8	Let's Sing 1	Hello, How are you?
		あいさつ	Let's Try 1	8	Let's Sing 2	Goodbye to you.
	Hi, English 3	数字	Let's Try 1	10	Let's Sing	1,2,3,4,5,6,7　1,2,3,4,5,6,7

③ 児童・生徒間の連携（予定）

・中学生による絵本の読み聞かせ

・中学校生活についての話　We can!2　Unit9　“Junior High School Life”

・小中合同授業や中学生をリトルティーチャーにした授業

④ 指導内容の連携

授業の始まりにペアやグループでの「Small Talk」を入れる。「Small Talk」を行う主な目的は，既習表現を繰り返し使用できるようにしてその定着を図ること，対話の続け方を指導することの２点である。あるテーマのもと，５年生は指導者の話を聞くことを中心に，６年生はペアで伝え合うことを中心に行うとされている。結の橋学園では，低学年から毎時間の授業の初めに子ども同士のやり取りを中心に行い，９年間を通して英語でのコミュニケーション能力は上げたいと考える。

⑤ 教師の連携

・小中でお互いの授業を参観し合ったり，指導内容や指導方法について意見交換をしたりする。

・中学校英語教師による小学校での乗り入れ授業，中学校英語教師と小学校教師の中学校での TT

ウ 作成資料について

① 英語科・英語活動指導計画（E プラン）

② 低学年英語活動指導計画

③ 小学校外国語教育における絵本の活用

④ 小中教材連携一覧表

⑤ 結の橋学園 Can-do リスト

⑥ 中学校パフォーマンステスト

⑦ 小中各単元振り返りシート
⑧ Small Talk Topics（例）
⑨ 今日のひと言英語

Ⅵ 前期のまとめ

1 成果

・小学校と中学校の外国語教育の内容を比較検討することで，指導計画を系統的・横断的に作成することができた。
・佐良浜小学校、伊良部小学校の両校で授業をすることができ，実態を把握すると共に，指導計画を修正することができた。
・結の橋学園卒業後の生徒の姿を共有することで，各学年の学習到達目標を作成することができた。

2 課題

・佐良浜小・中と伊良部小・中への情報の共有ができていないので，今後外国語部会を立ち上げる。
・小学校の担任と授業の打ち合わせ時間の確保
・小学校高学年用のパフォーマンステストの作成をしていく

Ⅶ 後期実践について

1 授業づくりについて

（1）小学校の授業づくりの視点

① 前時までに学習した表現を使い，コミュニケーションをする場面を設定する。分からない語彙があれば，ジェスチャーを使ったり言い換えたりして，コミュニケーションを続けるよう指導する。
② 授業に活動を多く取り入れたり学習の場を移動したりすることで，児童が意欲的に参加することができる。
③ 正しい発音指導のため，デジタル教材を使用するだけでなく，中学校教諭にゆっくり発音してもらったり使用語彙の練習をしてもらったりする。
④ 授業内容に合う絵本がなければ「自作の絵本」を作成し，授業の最後に使用表現の確認として，一緒に音読したり質問などのやりとりをしたりする。

（2）中学校の授業作りの視点

① 小学校の教材を活用することで，生徒が小学校で学んだことを思い出し，導入が容易になったり活動がスムーズになったりする。
② 小学校での学習内容を踏まえつつ，やり取りの場面設定を意識して活動を組み立てることで，生徒はこれまでに習得した知識や経験を活かし，コミュニケーションを行うことができる。活動の際，分からない語彙があれば，ジェスチャーを使ったり言い換えたりして，コミュニケーションを続けるよう指導する。
③ 小学校教諭と一緒に授業をすることで，英語に不慣れでも大丈夫であることを生徒に感じ取らせ，間違いを恐れず自信を持って授業に参加することができるようにする。

２ 実践授業①

１　単元名　Unit14　Who is your hero?　（『We can! 1』 Unit9）

２　単元目標

(1)自分があこがれたり尊敬したりする人について，自分の意見も含めて紹介し合おうとする。
（コミュニケーションへの関心・意欲・態度）

(2)第三者が得意なことを表す表現に慣れ親しむ。また，文字を読んだり書いたりすることに慣れ親しむ。（外国語への慣れ親しみ）

(3)英語と日本語では，書き方に違いがあることに気付く。
（言語や文化に関する気付き）

３　単元について

〇児童観

本学級の児童は，素直で活発な児童が多く，ペアやグループ活動も積極的に行う児童が多い。事前外国語学習アンケートでは，「英語が好きですか？」の問いに対し，「あまり好きではない」と答えた児童が６名いるため，英語嫌いをなるべくつくらないためにも，授業内容を精選したり，移行期間であるため，目標を易しくしたりする必要がある。授業では積極的に声を出して使用語彙や使用表現を練習したり，コミュニケーションの場面でも，間違いを恐れず積極的な姿勢が見せたりする児童もいる。しかし，「英語を話すときに，間違えるのはないか不安に思いますか？」の質問では，１３名の児童が「そう思う」と回答している。新学習指導要領では，よりコミュニケーション能力を大切にしているため，ジェスチャーや表情などのノンバーバルコミュニケーションも意識しようと指導している。

〇教材観

本単元は，今年度移行期のため，全８時間を５時間に短縮して学習する。ここでは，can～に加え，ここでは be good at ～「～が得意である」の表現に出会う。できることや得意なことを交流したり認め合ったりする中で，自尊感情が育つと思われる。また，読むことに関しては，最後の発表の際のよりどころとなるよう，自分が伝えたい内容を表す語句や表現を書き写すことである。児童は，音声で十分に慣れ親しんだ表現を書写して読み，発表をリハーサルしたり，ペアでリハーサルの際に，書写した原稿で発表内容を確認したりする。こうした活動が６年生での読みの学習につながっていく単元である。

〇指導観

本研究では，「主体的にコミュニケーションを図る資質・能力の育成」をテーマに，９年間を見通した英語教育のカリキュラムを作成し，小学１年生から段階的・横断的な指導，ペアワークやグループワークなどの学習形態の工夫を実践的に研究してきた。

本授業では，授業のはじめや使用表現を習った後にペアワークで実際にコミュニケーションをとる場面を設定している。また，使用語彙の練習や使用表現を導入するデジタル教材ではゆっくり再生がないため，中学校の英語教師にゆっくり音読してもらう。最後には，使用表現が入った絵本を読み，内容を確認していく。

4　主な言語材料

○表現（児童の発話）

Who is your hero? This is my hero. [He / She] can (cook well). [He / She] is (kind).

Can [you / he / she] (play baseball well)? [He / She] is (cool).

○語彙（児童が使う語彙）

Hero, so, because，気持ちや状態を表す語（active, cool, fantastic, friendly, gentle, kind, brave, strong, tough）

5　本時について

(1) 本時の目標

得意なことを表す表現を知る。

(2) 準備物

フラッシュカード，デジタル教材，振り返りカード

(3)本時の展開（１／５）

時間	○展　　開	●留意点　◎評　価
導入 (10)	○あいさつ ○ペアとあいさつをして，“Where is the pen?”のやりとりをする。 ○≪WC1-U9≫【Let’s Watch and Think】「映像を見て，わかったことを発表しよう。」	●元気よく ●デジタル教材が早いので，児童が困っているようなら教師が読む。
展開 (30)	○めあての確認 「得意なことを表す表現を知ろう！」 ○使用表現の確認 ○≪WC1-U9≫【Let’s Watch and Think】「映像を見て，わかったことを□に書こう。」 ○使用表現の練習 ・I’m good at playing the piano. ○Let’s Talk（ペアになり，得意かどうか尋ね合う。） ○≪WC1-U9≫【Let’s Listen1】「登場人物が，何が得意かを聞いて，線で結ぼう。」 ○Let’s Read [I’m good at･･･]	●全員で声を出して読み，確認させる ●can との違いにも気付かせる。 ◎得意なことを表す表現に気付いている。<行動観察・振り返りカード点検>

	○≪WC1-U9≫【Let's Chant】"Who is your hero?"	
まとめ	○本時の活動を振り返る。 ○あいさつ	

〔授業の様子〕

【授業後の考察】

○中学校の英語教師と一緒に指導をすることで，児童の理解度に応じた速さで教科書を読んだり，発音指導をしたりすることができた。

○色々な活動を取り入れることで，児童が飽きることなく授業に参加することができた。

○授業の内容に合わせた自作の絵本を用いることで，児童の興味を引くことができ，また，使用表現の振り返りをすることができた。

❶使用表現の難易度が高かったため，児童の理解を促すのに時間がかかった。

❷使用するフラッシュカードの数が多かったため，児童の負担が大きかった。

❸ペアだけの活動だったため，意欲を持続させることができなかった。

＜改善策＞

❶移行期の児童に合わせた教材・教具の工夫をする。

❷使用語彙を精選する。

❸ペアを変えて同じ表現を繰り返し使用し，表現の定着を図る。

３ 実践授業②

1　単元名　　NEW HORIZON English Course 1　Unit 10「あこがれのボストン」（東京書籍）

2　単元の目標

(1) 間違うことを恐れず、コミュニケーション活動に取り組むことができる。

【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】

(2) できることやできないことについて話したり、尋ねたりすることができる。

【外国語表現の能力（話すこと）】

(3) can や can't を用いて、正しい文を書くことができる。

【外国語表現の能力（書くこと）】

3　単元について

(1) 教材観

本単元は、咲がベイカー先生の友人にボストン市内を案内してもらい、さらに美術館内で浮世絵を鑑賞するという展開の教材である。本文を通して、生徒はボストンやアメリカの歴史に触れることができる。

言語材料としては、can を含む文（肯定文、否定文、疑問文と応答、When ~?と応答）が扱われている。can を用いることで、主語に関係なく動詞の原形でやり取りができるので、生徒にとって比較的理解しやすい文法事項である。また can は外国語活動「Hi, Friends!」で学習済みであることから、そのとき使用したチャンツやゲームを取り入れることで、以前に学習したことを思い出しながら活動できるものと思われる。

(2) 生徒観

本学級の生徒は英語活動を楽しむ雰囲気があり、授業での発言も活発ではあるが、英語学習に対する苦手意識を持つ生徒も少なくない。以前行ったアンケートでは、これから伸ばしたい活動に「話すこと」を挙げており、ペアやグループ活動が好きであることから、コミュニケーション活動に前向きに取り組む姿勢が見られる。しかし、日常生活で外国人に話しかけられることはないという意識を持っているため、真剣さに欠ける部分がある。そこで、ＡＬＴに質問をすることを目標に持たせることで、英語を話すことに対して真剣に取り組むことができる機会としたい。

(3) 指導観

本研究では、「主体的にコミュニケーションを図る資質・能力の育成」をテーマに、９年間を見通した英語教育のカリキュラムを作成し、小学１年生から段階的・横断的な指導，ペアワークやグループワークなどの学習形態の工夫を実践的に研究してきた。小学校の教員とＴＴで授業を行い、小学校の教材を用いることで、生徒が取り組みやすい雰囲気を作っていきたい。

本授業では、Can you ~? を用いて相手のできることやできないことについて質問をし、その結果をクラスのみんなに伝えることをねらいとしている。メモを取らずに活動させることで、より自然に近い会話ができるよう工夫していきたい。

4　評価規準

ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ 外国語表現の能力		ウ 外国語理解の能力	エ言語や文化の知識理解	評価方法
	話すこと	書くこと			
間違うことを恐れずコミュニケーション活動に取り組むことができる。	できることやできないことについて話したり、尋ねたりすることができる。	助動詞canを用いて、正しい文を書くことができる。			ア　活動の観察 イ（話すこと） 活動の観察 パフォーマンステスト イ（書くこと） ワークシート 評価カード 単元テスト

5　本時の学習

(1) 目標

○間違うことを恐れず、コミュニケーション活動に取り組むことができる。

【コミュニケーションへの関心・意欲・態度】

○Can you ~? を用いて、友だちにできるかどうかを質問することができる。

【外国語表現の能力（話すこと）】

(2) 本時の展開

時	指導過程	生徒の活動	教師の活動	備考
挨拶 8分	Greetings	・全員であいさつ ・日付や天気など ・Small Talk can, can'tを使った会話	・生徒が答えた日付などを板書する ・Small Talkのモデルを見せる	※学習用具が揃っているか確認する
導入 7分	Who am I? (Let's Chant ｵﾌﾟｼｮﾝ2)	・クイズをしながらCan you? の質問に慣れる	・クイズをしながらCan you ? を使って生徒に質問する	
	Let's Chant (Let's Chant ①)	・Chantに合わせて歌う	・リードしながら一緒に歌う	※Chantで音として定着を図る
	Today's goal canを使って友だちに質問をし、その結果をみんなに伝えることができる	・評価カードに書き込む	・Today's goalを板書する ・机間指導を行い、生徒の様子を確認する	※goalを全員で確認する
展開・活動 30分	Pointing Game （３人１組）	・ゲームをしながら動詞の意味を確認する		※動詞の意味が理解できているか留意する
	質問タイム	・Can you ~? を使ってパートナーに質問する ・メモは取らずに質問する	・活動の前にモデル会話を見せる ・机間指導、支援を行う	※つまずきが見られる生徒を支援する
	友だち紹介	・can, can'tを使って質問の結果を紹介する	・Let's Chant(ｵﾌﾟｼｮﾝ4)で発表の仕方を確認する ・発表の前にモデルを見せる	※発表前にペアで確認作業を行う。

まとめ 5分	自己評価 Today's sentences Greetings	・授業のふり返り ・Today's sentencesを書く ・終わりのあいさつ	・授業のまとめを行う ・Today's sentencesを提示 ・評価カードの回収 ・終わりのあいさつ	※ALTへの質問を考えることで、ﾊﾟﾌｫｰﾏﾝｽﾃｽﾄへつなげる ※語順が理解できているか留意する
	Shuaib先生は絵が上手だけど、他には何ができるのかな？ 聞いてみよう！			

〔授業の様子〕

【授業後の考察】

○ 小学校のチャンツや絵を用いることで、生徒は馴染みがあり取り組みやすい。

○ 小学校教師とのＴＴにより、

○ 基本となる英語を繰り返し用いて活動させることで、定着を図ることができた。

❶ お互いに質問をするとき、内容が例文の範囲を超えていなかった。

❷ 友だち紹介のとき、声の大きさや発表態度などをきちんと指導すべきであった。

❸ ほとんどを中学校教諭が進めてしまい、小学校教師の授業への関わりが弱かった。

＜改善策＞

❶「例文以外のことで質問したいことを聞こう」など、教師の声かけがあれば、生徒は更に活発にやり取りができる。

❷ 教師のモデル発表の際、良い例と悪い例を見せ、生徒に考えさせる。

❸ 細部まで打ち合わせをするための時間を確保する必要がある。

【主な参考文献・引用文献】

村端五郎・高知県田野町幼小中連携英語教育研究会　2005
「幼小中の連携で楽しい英語の文字学習 -10 年間の指導計画と 40 の活動事例-」　明治図書
松川禮子・大城賢　2008　「小学校外国語活動　実践マニュアル」　旺文社
サンドラ・サヴィニョン　2016　「コミュニケーション能力 -外国語教育の理論と実践-」
法政大学出版局
文部科学省　2017　「小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説　外国語活動・外国語編」
文部科学省　2017　「中学校学習指導要領（平成２９年告示）解説　外国語編
文部科学省　2017　「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」
大城賢・萬谷隆一　2017　「小学校英語早わかり実践ガイドブック-新学習指導要領対応-」 開隆堂
大城賢・萬谷隆一　2017　「はじめての小学校外国語活動実践ガイドブック-新学習指導要領対応-」
開隆堂

【指導助言】

琉球大学教育学部教授　大城賢

【アンケート調査協力者】

宮古島市立佐良浜小学校３，４，５，６年生
宮古島市立伊良部小学校３，４，５，６年生
宮古島市立佐良浜中学校１，２，３年生
宮古島市立伊良部中学校１，２，３年生